



貯金の習慣を身に着け、学校に通う子どもたち。

アイキャンがマニラ市で運営するドロップインセンターには、7～17歳の路上の子どもが日々20人ほど通っています。その多くは、市場での野菜の皮むきや物乞い等で家族の生活を支えており、学校には通っていません。その中で、アイキャンは栄養ある食事の提供に加え、基礎的な読み書きや計算を教え、学校への復学を促進しています。2017年には、9名が復学できています（2017年9月号）。

アリソン君（11才）は、復学前、家庭の事情で2年間学校へ通えませんでした。復学してからは、がんばって通っています。「自分は他の友達よりも勉強が遅れているから、字が読めなかったけど、学校を続けて徐々に読めるようになったし、書けるようになってきて嬉しい」と、勉強をすることの大切さと喜びを実感しています。また、「友達が優しいし、一緒にいて楽しい。お昼ご飯やおやつを買うお金が無いけど、先生がたまにくれることも嬉しい。」と、学校での楽しい時間について、話してくれます。この3月、彼は、3年生への進学が決定しました。

しかし、復学しても、アリソン君のように通い続けるのは容易ではありません。職員のマヤさんは、「路上の子ども達は、通学に必要な服や靴、文房具が買えず、周りに対して劣等感を持ったり、家族の生活を支えるために路上での仕事へ戻ってしまい、通学を継続することは難しい」と言います。そんな子どもたちの悩みを解決しようと、この一年、「貯金箱プロジェクト」に力を入れました。これは、一人ずつの貯金箱に、日々の路上での稼ぎから貯金し、お金は、通学に必要な物を買いたいと、本人がソーシャルワーカーへ申し出た時に引き出せる制度です。本来は、親が通学のお金を用意すべきですが、それができないために、みんなで考えました。子どもたちが日々の稼ぎから自由に使えるお金は数十円程度ですが、それでも、限られた稼ぎから自主的に貯金する習慣を身につけ、現在では多くの子どもが数千円以上貯めています。

アリソン君は、今はまだ、特に字を書くことが苦手ですが、アイキャンスタッフのエドガーは「新学期が始まる前にまた猛特訓を始めようね」と励ましています。アイキャンでは今後も、1人でも多くの子どもが復学し、教育を全うできるよう活動を続けていきます。



ICAN マニラ事務所
Mariditha C.
Mondares
～プロフィール～

2008年にアイキャン入職。看護師。栄養管理を中心に、路上の子どもたちの事業等に従事。

Project Site



〈特集〉
①マニラ

※●はアイキャン活動地
※番号は裏面に対応

認定 NPO 法人アイキャン

〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須 3-5-4 矢場町パークビル 9 階 TEL/FAX : 052-253-7299 メール: info@ican.or.jp

ホームページ <http://www.ican.or.jp> フェイスブック <https://www.facebook.com/ICAN.NGO>

Close up

I. 危機的状況にある子どもたちと「ともに」行う活動

全6事業の中から、今月はこちらの2つをご紹介します。

①路上の子どもたち

3月21・22日／マニラ(フィリピン)

元路上の若者による路上教育



カリエカフェのメンバー3名が、路上の子ども計24名に対し路上教育を実施しました。メンバーは、自分たちが路上で仕事をしてきたときの経験を共有し、過去に自分がしてしまった悪い習慣や、良い行いなどを子どもたちへ伝えました。メンバーのリカさん(18歳)は「幼い子どもたちへ路上教育を行うことは忍耐のいることだが、自分たちの経験を共有するのは大事なことだと思う」と話しました。

②紛争の影響を受けた子どもたち

3月12日／オボック(ジブチ)

イエメン難民障がい児への物資提供・貸与を実施



イエメン難民が住むジブチのマラカジ難民キャンプには、10人前後の障がい児がいます。医者の推薦のもと、その内の6人にリハビリ等のための物資提供や貸与を行いました。右半身麻痺で動きに制限のあるイブラヒム君(15歳)へは、リハビリのための自転車が貸与されました。その後、アイキャンスタッフが付き添ってリハビリをする中で、「身体のバランスがよくなり、体調がかなり改善されました」と語りました。

II. できること (ICAN) を増やす活動

全7事業の中から、今月はこちらの2つをご紹介します。

スタディーツアー・海外研修事業

2月28日-3月4日／マニラ

現地への理解深めたスタディーツアー



今春開催したスタディーツアーに、総勢19名が参加しました。ツアー2日目にはパヤタスのごみ処分場周辺の家庭や、フェアトレード商品を生産・販売している住民組織 SPNP を訪問しました。参加者からは、「家庭訪問で現地の人々の声を聞くことができたのは、貴重な経験だった」、「見たこと、感じたことをまわりの人に伝えていきたい」、「自分のできる活動を1つでも実践しようと思う」といった感想がありました。

国際理解教育事業

3月31日／愛知

フィリピン駐在職員による帰国報告会



フィリピン駐在員の一時帰国に伴い、ミンダナオ島でのマラウイ紛争に対する緊急救援活動や、平和構築活動についての帰国報告会を行いました。7名の参加者からは、「フィリピンの抱えている問題の根深さについて考えさせられるきっかけとなった」、「実際に現場で活動している駐在員の生の声を聞くことで、現地での活動をより鮮明に理解できた」などの感想をいただきました。

今月の Topic



日本政府とのプロジェクト開始

3月8日／ジブチ

イエメン難民キャンプでの子どもの保護活動に対して、日本政府外務省から資金提供を受けることができるようになりました。この日、ジブチの日本大使館において、署名式が行われ、在ジブチ大使より「今後とも日本政府は、アイキャンの活動を応援していく」とのお言葉をいただきました。本事業では、難民の若者の能力強化や子どもの保護に関する施設の建設が行われます。

今月の ICAN なる人

◎永野さん、日々「できること」を模索しながら実行して下さい、ありがとうございます！

マンスリーパートナー 永野正憲さん「アイキャンの理念、大好きです。」

インタビュー:3月31日

アイキャンを知ったのは、5年ほど前です。勤務先の環境ボランティアの一環で、フィリピンの子どもたちへ送る環境教材の作成に参加させてもらい、名古屋の事務所におじゃましました。そこで知ったフィリピンの子供たちへ何かできないかと思い、スマイルチケットの英会話に週1回通うことにしました。受講料の一部で子どもたちを応援できるというのは、素敵なことだと思います。ただ、その後勤務地が変わり通えなくなってしまったため、代わりにできることをと思い、マンスリーパートナーになりました。



たまたま一昨年、太平洋戦争で幼いころに父を亡くしている義母の、一度その地を訪れたいという希望を叶える慰霊の旅を計画し、初めてフィリピンを訪れました。日程的に、直接子どもたちと交流する時間は取れませんでした。路上の子どもたちも見かけました。子どもたちと同じ空気を吸うことで、彼らの困難な状況をより身近に感じられるようになりました。

今年も参加した環境教材作成で、フィリピンの子供たちとスカイプで交流する機会をいただきましたが、恵まれない環境に置かれているはずなのに、明るく前向きな子どもたちの姿に逆に勇気づけられたような気がします。「人々の『ために』」ではなく「人々と『ともに』」というアイキャンの理念、大好きです。みんながんばってね！子どもたちも、ボランティアに参加する皆さんも、アイキャンのスタッフの皆さんも！私もできることを続けたいと思います。